

昭
和
二
十
四
年
七
月
二
十
三
日
第
三
種
郵
便
物
認
可
行
(毎月一回・十五日発行)

(通第二五一号)

慈 光

第二十二卷
第四号

次

悲觀思想と信仰(上)	近角常観	(1)
一道会の記(二)	榊原徳草	(5)

目

歎異抄愚考(二)	杉藤美代子	(11)
鉄格子の中の帰敬式	佐々木義軌	(15)
私という奴	三瓶徳英	(23)

悲観思想と信仰 (上)

近 角 常 観

現今(明治三十九年)の時代思潮は如何なる傾向かというに、いろ／＼ある中で著しいのは悲観思想である。近頃青年がしきりに人生のことを考へて大層悲しくなつてきて華嚴の滝に投身するあり、浅間の噴火口に入るあり、かかる流行は大いに憂うべきことである。またこの傾向が文学にあらわれて悲哀文学となつてくる。なお一属きりつめて云へば、世間すべての人が煩悶苦悩をする。理想が行われぬとか、自分の思う通りに人がしてくれぬとか、いろいろと苦しんでくる。つまりこの人生は苦しい人生であるといふことが今日一般の傾向である。

もつともこのようなことは過去の日本においても見ることが出来る。彼の源平の時代がそれである。平安朝以来の長い間の大平な世の中が、降つて源平の時代になつて、京の都は修羅のちまたに變じ、世は矢叫びの聲に満ち、妻子は離散し、父子相戦うという有様であつたから、今まで問題にのぼらぬ人生が、新しい問題となつてきた。彼の「忠

ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならず」の重盛の歎声がそれである。文学にもそれがあらわれて「園精舎(ぎおんしようじや)の鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅双樹(さらそうじゆ)の花の色、盛者必衰の理(ことわり)をあらわす」という如き、また『源平盛衰記』『平家物語』の如き厭世(えんせい)文学が起つた。この反面には平家の公達(きんたち)が優美に流れて、男子でありながら化粧をしたり、齒をくろく染めたりするという風が行われた。これが丁度現時一面には悲哀文学が行われる、一面に元祿風が流行するのと同じ現象である。

この時代思想を一言にして云へば、思想の変調を來たして漸く人生が問題になつて來たので、これから飽くまで苦しみ戦つて、最後の信仰に至る序幕である。悲観はもとより健全でなく、喜ぶべからざる現象であるが、さりながら、大なる最後の結果を得るには、それだけの苦があるべきことは当然である。みだりにこの悲観思想を庄伏し去ら

んとして、運動を奨励して活潑にしよもの、或る手段を借りて浮いた方に持ちきたそうとするのは、一向につまらぬことである。恰も人が煩悶の時に、つけ元氣をやつたり、酒を飲んで憂を忘れようとしたり、其他いろいろの方法で煩悶を癒やそうとしても、とうてい駄目であると同じである。さればこの時代の悲観的傾向を如何にすべきかといふと、社会全般の問題は即ち各個人の問題であつて、各個人が悲観に沈んだ結果、絶対の光を見出すところまで進んで行つて安心を得る如く、社会も遂には信仰の光を得て安泰平和に至るのである。古も此の如く、今も亦此の如く、千古万古あたらしき問題が宗教の問題である。

我々の宗教の本源たる大聖釈尊の事実それ自身が、實際に人生の問題に解決をあたえた標本である。今日世間一般の人の仏教に対する考へ、かつまた西洋人の仏教に対する批評は、おおむね仏教は厭世教である、遁世(とんせい)主義であるといふに帰するが、これは大いなる誤解である。成程ちよつと考へるとそう思ふだらうが、それは非常に肝腎な要点の見えぬことである。

そも／＼仏教が悲観であるというよりは、まず人生は眞面目に考察すれば、自然に悲観に行くのが当然の順序である。その悲観をば宗教の初門として、遂に確乎たる地盤を与えたところが仏教の中心点である。大聖釈尊は人生必然

の通るべき道を通つて最後の光に達し、それをもつて世人を導き、入滅の後までも世間の大灯炬(たいとうこ)として残りたまうた。それであるから仏教は人生の必ず過ぐべき当然の道を教えたのである。世人は仏教をもつて一概に悲観のものと考えるのは、仏教が問題にするははじめのところをみて、その最終の非常に自由の境界に出た点を見ずにおわるからである。この点を云へば西洋の宗教の如きも、その過ぎて行つた経験を見ると、やはり同じ道を過ぎてゐる。彼のアウグスチン、もしくはルーテルなどの経験は、その中の著しいものである。しかしその成り立ちが仏教のように純粹に筋道を終始一貫した痛快なことを見ることが出来る。実に釈尊の通られた道筋、生きた人生の道筋である。現代の青年の悲観思想は、その動機は必ずしも善ではあるまい、又その悲観の心的状態がさほど感ずべくもないかもしれぬが、ともかく人生は苦なのであるといふところから、そも／＼問題になつたところが、宗教に手のついたところである。

釈尊の伝記を案するに、彼は王城榮華の中にありて十分満足の時において、老病死、憂悲苦悩の眼前の事実を見て人生を問題としたところに宗教の端緒(たんちよ)を開いている。平生無事満足の時にありて凡人は軽く見すごす通

常眼前の事実を問題として、天いに苦しまれたのである。我等凡人は自分自身の病によつてはじめて驚き、自分が死に瀕して今更の如くに驚く、すこぶる鈍感なものであるが、釈尊の宗教感、このように眼前の事実をもつて直ちに自己身上に考えたまえる強きものであった。

この生死問題は平凡の問題であるが如く、実は大切な問題である。釈尊はこれを「この問題を研究してみよう」というような冷かな態度でなく、又「人が苦しんでおる、悲しんでおる、あれはどうしたものだ」という如き余裕のあることでもなく、實際自身の上に深い感じをもつて、もうとてもたまらなくなつたのである。

一夕（いつせき）太子のこの深い悲哀を忘れしめんために、父の王によつて遣（つかわ）しおかれた幾百の婦人等は、天女の如く愛らしき姿をもつて、微妙の音楽を奏し、舞踏し、唱歌し、もつて世尊を慰めんとせしも、太子は俗的快樂をいよいよ馬鹿らしく感ぜられ、遂に夜中に及んで太子が眠からさめて、彼の婦女等の遊びつかれて眠る様を見給うと或は口に泡を吹き、或は歯をきしらせ、或はゆがみ、或はねごとを云い、或は衣を取乱し、あさましき様相が明らかにあらわれてあつた。天宮の如き美麗な室内も、この時の世尊には実にいとうべき屍を入れてある骨堂に入るが如く感ぜられた。世間平凡のものが、何とか彼とかし

こまやかな感情をもたれる上人には、如何ばかり強い感じを起こされたか知れぬことである。

かくのごとく釈尊も諸宗の祖師達も、出家入道のはじめはいずれも人生に対する悲観厭世の強い感じがそもそも動機となつておる。人生無常は千古眼前の事実であつて、実に「明日ありと思ふ心の仇桜」という觀念が、いわゆる人生問題の要点である。人生問題といへば耳新しく聞え、生死問題といへば通世的に聞えるけれども、生も死もいずれも人生の問題であつて、これを根本として人生一切の問題がみなこの中に含まれてある。人生問題、生死問題、ことばは異つても意味は一つである。生老病、死、憂悲苦惱の問題、即ち人生の百般の問題はみな宗教の問題である。

世人あるいは仏は無常觀を説き、キリストは罪惡觀を説く。無常觀から入るは仏教であつて、罪惡觀から入るはキリスト教であると論ずる人があつたが、これは妄断である。仏教の問題とするところは、生、老、病、死、憂悲苦惱である。即ち人生の内容そのものである。もう一つ云うたならば、煩惱懊惱である。古来から云うところの煩惱がそれである。今日では煩惱といへばその文字の本来の意味を感ぜぬけれども、我々今日の有様は生死問題に向つて煩惱で満たされているので、その煩惱を強く云えば罪惡である、罪惡即煩惱である。

きりに愉快がつておる五欲の境も、よく考えてみれば皆この如きものである。釈尊の如く目を醒まして人生を見れば、世の中は馬鹿氣たというよりも、むしろ悲しむべき境遇であつて起居も安からず感ぜられたから、今日正しく出家の本懐を遂ぐべしと決心したまうた。

又親鸞聖人の出家當時の感じの如きも、深い無常觀である。聖人九歳の春、栗田口の青蓮院にて得度の式を挙げんとしたが、日暮れとて明日に延ばすことになつた時、聖人は高らかに「明日ありと思ふ心の仇桜、夜半に風の吹かぬものかは」という古歌を吟じ出して、明日は期すべからずという痛切な感慨をのべられたので、すぐ式を行われた。常人は今日もあり、又明日もあると思つておるうちに、人生無常の感が胸中に溢れ口をついて出るといふことは、実にもつて聖人の宗教感の深くかつ強いことがうかがわれる。

其他、道元禪師の如き、母の喪にあたつて、脈々と立ちのぼる香煙が風に散らさるるのを見て、深く無常の感にうたれて出家された。又法然上人は自分のいのちとするとこの親が、突然仇のために殺された。親がその最後の時に臨んで、汝は仇を討つようなことをするな、怨にむくゆるに怨をもつてしたならば永劫輪廻（ようごうりんね）の尽きるときがない、よりにて仇を忘れて出家して父の菩提（ぼだい）をとむらい、且つ一切衆生を救えよ、と諭された。

「一日暮し」

正受老人

いかほどの苦しみにても、一日と思えば堪えやすし。樂しみもまた一日と思えばふけることもあるまじ。親に孝行せぬも長いと思ふゆえなり。一日一日と思えば理屈はあるまじ。

一日一日とつもれば百年も、千年もつとめやすし。

一生と思ふからに大そうなり。……一大事と申すは今日只今の心なり。それをおろそかにして翌日あることなし。

すべての人に遠きことを思えば謀ることあれど。「目的の今」を失うにこころづかず。

「よき一夜」

中阿含經

過ぎ去るを追いおもうことなかれ、未だ來たらぬを待ちもろくすることなかれ。過去は過ぎ去り、未來ははまだ來たらざればなり。

ただ現在の法を觀よ、うごかず、たじろがす。それを知りて、ただ育てよ。

今日為すべきことをなせ。誰か明日死の來るを知らんや、かの死魔の大軍と戦ふことなきを知らんや。かくの如く熱心に、日夜にたじろぐことなく住するを、げに聖者は、よき一夜と説きたまえり。

一道会の記 (11)

榊原徳草

引続いて、白井成允先生の御話を拝聴しました。その大略は左の通りでありました。

私、毎年この一道会に遭わせて頂き、そのたびに思うのですが、私は池山先生にお目にかかったことは無いのですが……。昨日も浄住寺さんが来られて、その時のお話に、近角先生と池山先生とはお兄弟のようだからと云われましたが、その近角先生に私はお世話になってお念仏を聞かせて頂いたので、まあそのお蔭で、今日のような会に毎年あわせて頂くことになり、有難く思うのであります。

年をとつているせいで、毎年お話をせねばならないようになりませんが、先程の池山寿夫先生のお話を聴聞しますと、「話す者の態度」となってしまうようで、まあそういう業報でしょうな……。

私、この頃、歎異鈔の奥底に流れている人生観、生命観

転せしめる。この頃これをしきりに憶うのです。これを一つ問題とすること。

第二には罪惡の問題であります。第一章に「そのゆえは罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」とあります。私、青年の頃この章を見て、罪深く惡重いもののため、煩惱が起ってはげしくなる者、そんな人のためのものか、と思っていました。が、「惡重き衆生」とは、一般の人のことではなくて、自分のことと教えられたことがあります。罪惡深重の衆生とは私自身が罪惡深重なのである、自分への教である、この頃しきりに思うのです。何か自分は正直な人間であると心の中に濃く存在しています。が、煩惱が熾んにもえたつ自分のことが年と共に明かにされてきました。

「煩惱熾盛、罪惡深重」この状態が久遠劫來の宿業でそうなっている、それに違いないと思う。夜、時々めざめることがあります。若い時のことを思い出しますとなさげなく自分ながら歎かすにおれないことが時々あります。その罪惡深重、若い時からの姿が、年と共にはげしくなってくる姿で、それは宿業として離れ得ない、どうしたらよいか、お念仏があつて下さつて、そこに安らひの場がある、そうなつて眠りにつく。そういうことが度々あります。これが第二のことです。

を思うのです。私としてはこれを無難作に考へている。生れてから死ぬまでと無難作に思つてゐるが、歎異鈔に語られている生命はそんな短いものでなく、三世にわたる永遠の生命を問題とするものであつて、此所が歎異鈔を承るに ついての根本的反省をせねばならんことを思うのであります。生前と死後にわたる生命という、そんないのちがあるのだからかと思うが、それは釈尊から伝えられた生命、生命観であつて、親鸞聖人が二十九歳の御時に法然上人のもとに参られたときのこと、聖人の御内室である恵信尼公の文書の中に「生死出ずべき道」をたすね参らせた、とあります。これは真宗だけでなく、禪も天台も華嚴も皆、「生死出ずべき道」を明かにすべき教であります。

生れ来り、死に去る、それは私共には迷いの生死となつてゐるのですが、これをいかにしてさとりの生死に転じうるか。仏法は迷いの中に生きてゐるものをさとりの生死に

第一のことは、三世のいのちのことで、第二のことは罪惡深重、私のこと、私自身のことです。第三の、三世に迷ういのちが、いかにして救われるか、というところ、それが安んじさせて頂くのは何によつてゐるか。歎異鈔第二章に「……いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」の一句であります。地獄は一定すみかの私が、そのことを怖れることなく聞くことができるここに救いがある。必ず浄土に往生させて頂くことができる唯一のやすらいの場所がある、はじめてやすらかに眠らせていただけることになる。

先程も、この名号碑に参らせて頂いて「一心正念直來オネガヒダカラスグキテオクレヨ」のあの言葉を押して私は非常に有難いのです。三世にわたるいのちの唯一の救いが、そこにあります。如来の方から「オネガヒダカラスクキテオクレヨ」との南無阿彌陀仏の呼び声であります。念仏一つ、ここに三世にわたる唯一つの救いがあります。この頃の感想を三つばかり、池山先生の御縁によって皆様に聞いて頂く、まあこんなことであります。

右が白井先生のお話でありました。先生は私の寺の近くにお住まいなので、私もよくお邪魔するのですが、先生もよく訪ねて下さいます。又先生は私の知らない時でも、時

折り散歩に境内にやつてこられ、名号碑を拝し、その裏に廻られて「一心正念直来」をじつと拝んでおられる。そうしたお姿をお見上げすることが時々あります。池山先生のこの「一心正念直来」の御左訓（おんひだりよみ）、とても申しますか、その吾々の胸に直入してくる大悲名号の招喚に、幾度も、幾度もひきつけられておられるお姿を拝することであり、今日の御法乳は、私などマザ／＼と身心に滲みてまいるのであります。

引き続き花田先生のお話は犬要左の通りであります。

このような席を借りまして、私、去年春から発病し、皆様に物心両面に色々とお心配をおかけいたしましたことを御礼申し上げます。省みて無慚無愧、何一つ取柄のない私といたしましては、放哉の「容れものがない、両手で受ける」の一句をかりまして御礼の言葉といたします。

今年は無事に参らせて頂きましたが、去年の病氣から今年にかけて、池山先生の「たのまるるただ念仏のわれにありさるべき業はさもあらばあれ」の御歌がしきりに思い浮びます。先生は歎異鈔の第七章「念仏者は無碍の一道なり……」の一言一句が、御自身の体験として信味されてこの一首がお出来りになりました。私は鈍感であります、そ

は、地獄一定の永遠の闇路のさすらいであります。又生あるものは死ぬ、これは当然の因果です、それなのに情意の世界では、当然の死を当然として受取れないで、いやで逃げることに懸命な始末です。

この様に、善悪、生死の道理を聞きながら、智識の上ではうなずけても、身心の全体でそれが解っていません。ところが「たのまるるただ念仏」の仏智の不思議力を身にうけて、死にたくない、名残りが惜しい、如何に見苦しい死様をするかわからない私を、無辺の仏智に照らされ、無窮の大悲に護られて、ようやく善悪、生死をこえて「さるべき業はさもあらばあれ」と、自分の身にもつ業として身に受け容れて、不思議にもそこを超えさせて頂けるのであります。ここで、自分の力では受取れなかった地獄一定と死が身心に受取れるのは、全く仏智不思議の力であり、たのまるるただ念仏のお慈悲のおかげであります。

経に「因縁を知る者は仏を見る」とあります。しかし私共の利己心のかたまり、身勝手な煩惱の奴隷とも云うべき身には、悪果をこぼみ、死を避けつづけます。そうした私共が、その一切を受取ることができなのは、超因果の仏智不思議の御力ぞえあってはじめて可能なことであります。

聖人の有名な常の仰せに

「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一

の時以来ずつと心に刻まれて、何時も新しく聞かせて頂いております。

「たのまるるただ念仏のわれにあり」、たのみ力になって下さる本願念仏が他人でなく、我身に恵まれている。してみれば「さるべき業はさもあらばあれ」身にもつ業であれば、善かれ悪しかれのがれられぬのであるが、私共は身勝手なもので、都合のよいものはうけとるけれど、都合の悪いものは受けたくないのが常である。それなのに「さるべき業はさもあらばあれ」と云えるのは、お念仏のたのもしさあってのうえである、と、池山先生がお話し下さいました。

最近私は、あの「ただ念仏」——たのまるるただ念仏の、あの「ただ念仏」は、そのまま仏の智慧である、般若（はんにや）の智慧、仏智であることを非常に感じますのであります。今も白井先生が、池山先生と近角先生は「兄弟のようであると仰言いましたが、私は近角先生は「どこどこまでもお見捨てのないおまこと」と常に仰言り、そこに慈悲の観音菩薩を感じ、池山先生は「ただ念仏して」と常に述べられて、そこに勢至菩薩の智慧を仰いでおります。

さて私共は因果律を教えられますが、善因善果、悪因悪果だけでは私自身の救いはありません。私の思うこと、為すことすべて妄念妄想で悪業ばかりであり、その当然の果

人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身に
てありけるを助けんとおぼしめしたちける本願のかたじ
けなきよ

とあります。この「親鸞一人がため」というお言葉、こ

れも岡山時代から池山先生によく承っていました。その時

久遠このかた子故の廻向わたし一人をかたおもい
のお唄をもって教えられました。当時、御次男の病床に
居られて、子供の欲しいと思うものを、子が口に出して云
う前にチャーンと用意しておられた。それにつけても、親と
子は一つだ！二つであって一つ、一つであって二つと深
く感得されて「親は子が十把一からげで可愛いというので
なしに、一人一人がかけがえのないので、一人一人に全分
の心で向っているだね」と仰言って、聖人が「一人かた
めなりけり」と受取られたのも、仏様が「子の如く憐愍され
る真心心をそのままに頂かれた御述懐と知らされました。

このように池山先生からお聞きして一応は納得させられ
ましたが、さて私は名古屋に移り住みましたけれど子供が
ありません、だから自分の実感として受け難いのです。と
つおいつしています時、子はなくても親はある、五人の兄
弟もあったと気づきまして、親を思いますと、親と私と直
結されていて、五人の兄弟があっても、五分の一の親とは
思われず、兄や弟達がいくらあってもすこしも防げられず

に「私の父、私の母」と感じてゐる事実に驚くと共に聖人のお言葉も身にしみて知らされました。

とは云いまして、まだ何か物足りない、象が河を渡るような、川底にドッシリと脚がつかない思いがのこりました。それは、聖人の次の仰せ

「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」

の一句を軽く読んでいたためでした。そこで聖人の今の仰せの内容は、善導大師の「わが身は現に罪悪生死の凡夫曠劫よりこのかた常に没し、常に流転して出離の縁あることなし」の金言と規を一つにしていると、唯円大徳が言っておられます。これにつきましても、フト思いますことは、歎異抄の十三条に、聖人が「さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべし」と、かねてから仰言っていられるということの思い併せました。私共内に八万四千の煩惱をもつております身には、業縁次第で、どういふ煩惱が飛び出しますやら、どんな業ざらしをするかわかりません。

このことは池山先生から、度々うけたまわったことではありますが「内に煩惱具足の身には、業縁次第で、どんなことをしでかすかわかったものではない。自分には罪悪に対して免疫性はないから」と。参議員で亡くなった藤原あきさんが、昭和のはじめ頃、子供二人と主人を捨てて、藤原

文に、阿闍世、韋提希、提婆、これらは皆そのままに、「権化（こんけ）の仁」であって、親鸞を救うために浄土からあらわれて下さった方々であると渴仰しておられます。

こうした内容をもたれた聖人の常の仰せ「親鸞一人がため」の実語は、それをお聞きする私共の心に働いて、知らぬ間に、私一人がためと転じて、聖人の中に吸い込まれてしまふのです。

又この聖人のお心には、地上に一人でも救われぬ者があつたなら、聖人御自身が救いからもれるので、三世十方の衆生の救済は、可能、不可能の問題ではなしに、己（い）今（こん）、当（とう）の問題と信知せられ、万人の救いが聖人一人がためにおさまり、御一人のための本願は、そのまま万人の一人のためと自然に転入するのであります。私と聖人について申しますと、聖人の中に私が吸い込まれ、私の業報のすみずみまで、いたるところに聖人がお姿をあらわして下さるのであります。

さてそういう聖人の徳光にふれるにつけて、こういうことは人間の持ち合わせの相対分別の煩惱に濁った智慧から出るはずはなく、それはそのまま聖人の御身に働らく仏智、信心の智慧の建現であります。聖人が仰言った「姿を見れば法然、言葉をきけば弥陀の直説」と恩師を讃えられましたように、私共もまた聖人を同じ言葉で讃仰申すばか

義江氏の許に走りました、新聞雑誌にそのことを書き立て、世間からは人で無しときびしい非難をあびておりました。その時、池山先生は「母として妻として、これは重々悪いことであるが、この人と私とは、全然別人とは思えない、この人も私も内に八万四千の煩惱を持っているが、ただ私にその業縁がないからしないだけで、もっとひどい業ざらしをするかも知れない。更に如来の御目からは、業報がどうあろうと如来の一人子としてみそなわして下さる、云わば私共は親を同じうする兄弟である。なおも、この藤原さんが仏のまことに氣づいたら、あだかも阿闍世王の如く、私共の念仏の先達、妙好人ともなり得られる可能性がある。だから自分と藤原さんは別人だ、自分は決してそうした悪などするはずがないとは云えないのである」と述べ懐して下さったことがあります。ここを「さるべき業縁の催せば、いかなる振舞もすべしとこそ」と聖人が仰言ったのであります。

それにつけても最近しみじみと思われるのですが、親鸞聖人というお方は、地上のあらゆる罪業を縁として、のこらず御自身の姿をそこに見出しておられます。親殺しであれ、盗人であれ、子殺しであれ、どんな業報も「そくばくの業を持ちける身」の一句の中に一切衆生の業報がみんなはいってあります。その信味の至極が、教行信証の総序の

りであります。

聖人は「親鸞一人がため」と仰せられ、池山先生は「久遠このかた子故の廻向、わたし一人をかたおmoi」と仰言つて下さったことを、一流（ひとながれ）にお念仏の中に味わわせて頂いて「ただ念仏のたのもしさ」を渴仰申しております。

痼疾の身を名古屋と京都の間であっても、それは「はるばると」の構えで、恰も「各々十余ヶ国の境をこえて」とある歎異抄二章の関東の同行の心と一つの、生死をかけての聖人との拝面と同じ緊張感をもって、今年も先師追憶の一道会に参入された花田先生の右の御述語は、なみいる人の胸の裏に、耳の底に深くしみわたる御法味であった。生も死もわれなり、ことに死もまたわれなり、との実語を承ることができたこの会は感銘深いことで、それは、仏智不思議のお念仏の妙用でありました。生死巖頭を踏まえて池山先師に告げられた今日の御話は、私など如来の前に正坐せしめられ、お念仏一つを正受せしめられる感でありました。

(続く)

歎異抄愚考 (二)

杉藤美代子

第二条 (口語訳、その一)

念仏する、即ち「南無阿弥陀仏」と、仏のみ名をおよびすること、それが、本当に浄土に生まれる——即ち真実の救済されるものになるものであるのだろうか、それとも、地獄におちる——永遠に救済されることのない暗黒のおこないにすぎないものなのだろうか、私、親鸞はその確実な結果については、すべて未知なのだと言うほかないのです。(それでは私が、念仏よりほかなし、と云う確信をもちことは何によるものかそこを述べるならば、次のようなことになりす) 私は、煩悶の極、法然上人に「念仏にまよって救済されるほかなし」とさすべかられ、その一つを確信することになったのでありますから」とい、法然上人におだまされして——法然上人のおっしゃったことが全くうそで私は完全にだまされたという結果となって——こうしてナムアマミダブツと唱え唱え、それゆえ地獄におちたという事になったと仮定したところで、そのことは一向後

第二条、その二

解説

悔すべきことではございません。なぜならば、(もし私が)他の多くの修業を重ねて、成仏するはずの身であったとして、その自分が、(成仏するたねになるはずの修行をすることなくその代りに)念仏を申して地獄におちたというような場合にこそ、「おだまされ申して」という後悔もございましょう。然し(よく考えてみれば、この修行をして救済されるというそれが私には出来なかつた、それゆえの煩悶くるしみであつた。だから私にとつては)どの修行も、それによって真実のすくいを得るといふようなことに到達できない。この私ゆえに、いずれにしても地獄は、私の到達する結着点だ、全くそうきまっていたものなのです。

「念仏は、まことに浄土にむまるとねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、惚して

もて存知せざるなり」

何というひどいことばではありませんか。「十余ヶ国のさかいをこえて、生命をかえりみずしてたすねきたらしめたもうた」人々への、これが回答でありましようか。

「念仏よりほかなし」と断言した聖人が、次には、その念仏について、一見まことに無責任とも思われそうなお答えです。

然しこの条の終りまで読みますと「惣じてもて存知せざるなり」ときっぱり言い切った聖人の意図が読めるのであります。

同時にこの条は、彼の宗教なるものが「ほんもの」であることを示すあかしのようなものだともいえます。なぜなら、宗教とは、前述のごとく存在や実証ではなくて「信する」ものであることを如実に示すものであるからです。

中世のキリスト教僧侶が「罪状謝窺符」(つみのゆるさされた証書)を売ったという暴挙と、どれほどのへだたりがあるか。

近角常首先生は、ご生前「死後に、仏さまが手をあげてこうして(手まね)お迎えにいらっしやるとは思っていない」と仰せられたことがあります。

この条は、親鸞聖人が、極楽、地獄、を否定して居られ

たというような角度で論ぜらるべきものでもない。——現

に、月世界にロケットが飛ぼうとするような今世紀の科学的理解のレベルにおいて、われらのスピードというようなものを考えて見ても、この地球という相手あつての考え方で、ここを離れて、何も見えない宇宙を飛ぶとした時、進んでいるという実証をば、何をもつてすることができるといふことになる。もう一つの宇宙船がたまたま、より早いスピードで、前の宇宙船を追いつくとき、その宇宙船は後退した実証を持つてしよう。その時、自分も前進しているのだという実証すべき何もものもない。私たちの認識はすべて相対性のものでしかない。相対性原理の考え方であります。宇宙のはてはどうであるかということも、科学が進んだと言ったところで、いかなる学問を以てしても、この小さな人間の能力で解決できる問題の外にあるようです。

「絶対」という認識が、われわれからいかに遠いものであるか、を考へるとき、絶対を仰ぐ信仰の立場からすると、極楽浄土、地獄、という観念をさえあつさり否定し去ることもできず、さりとてそれは現世での体験であるとはさきり言い切ることのできないのではないかと感じられます。「惣じてもて存知せざるなり」この態度ゆえに、彼の思想は千年の後の人にも納得されるものであると思われま

「たとひ法然上人にすかされまいらせて……」

ここからは信心の実感です。ばかに力んで書かれているようにも取れますが、反対に「おれは」という力みを完全に捨てた、信心の人の姿です。然し、何と論旨整然。もともと、地獄必定の身、たとい法然上人にだまされたとして念仏して法然上人と同じ地獄におちたとしてもさら／＼後悔すべきものでない。この言い方は、法然上人に念仏を授かる前の親鸞聖人と、このお方にお会いしてから後のご自分とのくつきりとした相違、を物語るとも言えましょう。

自分の力で仏教の学問で理解しよう、救済されようと大へんな努力をされて、しかも大きな壁につきあたられて、上に出会い、「他のものは要なし、念仏一つ」と授けられて、今までの力み、煩悶、執念が、うろこの落ちたようにころりと取れ、夜が明けたのでありましょう。

その実感には、文字どおり、「たとい法然上人にすかされまいらせて」でもかまわない、その仰せについていく以外なんにもないんです。比喻でも、こけおどかしでもない、実感なのであります。そのことは「自余の行もはげみて仏になるべかりける身が、念仏もうぶして地獄におちてそうらわばこそ、すかされたてまつりてという後悔もそうらわめ」とのべられています。ここも「親鸞聖人ももあろう方だから、他の行をもはげんで仏になるようなお方なのでは

自分に力みのある職場では一切出ませんが、自分のくつろぎの場、家では、何か失敗を取じる思いの脳裏をかすめる時、ふっと何気ない動作、次の動作に変わる時、手洗い等に立った時、どうやら自分が称えるのでなく、何かにもよっておされて、おのずから口にはぼるつぶやきのように思いますが、赤裸々な何の飾りもない自己の姿をそのまま許していただくことではないかと思えます。

仏さまは、四角な仏壇の中に入って居られるのでなくて自由無碍な空気のように天地にみちて、時にすぐれたお人からの心の中をおしてことばとなって降りそそぐていもの思われれます。

さて本文にもどりましょう。

弥陀の本願（後で註）まことでいらつしやるならば、お釈迦様のご説法が、うそいっわりである筈はない。又お釈迦さまのご説法が真実であるなら中国（唐）の、浄土教を大成した高僧、善導大師の解説にいつわりのあろう筈はありません。その善導大師の解釈がまことであるならば、大師の「散善義」のご文を導きとして、仏の本願に従い念仏するほかなしと思ひ定められた法然上人のおっしゃることにはうそはないはずで。そしてもし、法然上人の仰せがまことなら、この親鸞の中すことも又、空ことではないであ

ないか」とか、論をおもしろくするたとえであろうとか思われそうですが「実感」ととるべきです。かつて自余の行——他の修行、学問、努力を、人の何倍もされた秀才で。その聖人が、それで悟ることはできないと行きつまった過去の実感をふまえているのであります。「地獄は一定のすみか」——この地獄からぬけ出られるものではない、現世の地獄でもあり、この考え方が、来世へ続くと考えても同じであります。

さて、その地獄必定の自分に授けられた「念仏」についての信念が次にのべられます。

第二条、その三

「とても地獄は一定すみかぞかし」のあとを受けます。すこし戻るようですが、昨日のところ、常観先生の「講義」の中にはこう出ています。

「何の気もなく念仏を称えつゝあるが、実は、念仏はわれわれのあれこれ考えたり議論したりする限界をこえた仏陀の御力によるものである」（つまり念仏は、わが力でなすのでなく、その念仏も仏陀の御力によって称えざしでもらっている。）……引用文も易しく書き直しました。

私も、念仏というのはそういうたぐいのものと思えます。日常何気なく「なむあみだぶつ」とつぶやくのです。

りましょうか。

つまり、私の信心においてはこうしたものであります。こういうわけでありますから、私の言うこの念仏をとってそれを心よりお信じ申しあげようとも、又それを意味ないものと捨てようとも、みなさん方それぞれのお考え次第であります。

第二条はここで終わっています。今回はその解説です。

◆ ◆ ◆ 近角先生法語 ◆ ◆ ◆

我身の悪しきを悲しむは如何にも殊勝の至りなれど、是れ悪しきものをたすけんと如来の大悲を疑うものなり。仏如何ばかりの力ましますと知りてか、罪惡の身なれば、すくわれ難しと思ふべき。

又我行の善からんことを勉むるは如何にも感心の至りなれど、未だ何れの行も及び難き我身なることを自覚せざるものなり。仏かねてしろしめして曾無一善（そうむいぢせん）の我身がために選択本願念仏を与えたまいしを知らざるものなり。

鉄格子の中の帰敬式

——名古屋拘留所教諭師——

佐々木 義 軌

鉄格子の中で去る十二月十四日、死刑囚が大谷演慧連枝の手によって帰敬式を受けた。

帰敬式を受けたのは名古屋拘留所に收容されているE君で、拙僧の教諭によって過去の罪を懺悔し、親鸞聖人の御教によって絶望と虚脱感が転じて、極悪人唯称仏、我亦在彼撰取中の法悦に明け暮れるようになり、十月一日に教諭の終った時、看守立合の席で、仏門入りの式をお願いしたいと申し出ました。私も感激して、早速名古屋教務所を通じてお願いしたところ許可されて、十一月十四日に本山で行われると同じ厳肅裡に、帰敬式が行われた。

かつては強盗強姦、殺人死体遺棄という身震いするほどの重罪を犯した両手に、本山からいただいた念珠をかけ、涙ながらに称名念仏する姿はまことに感無量であった。✕

さてE君の略歴をのべよう
入所 昭和四十二年六月二十三日

その頃から自暴自棄になり、はじめ工場の工員となったがすぐやめ、ハッターリ屋、露店商、香具師（やし）などしているうちに再び窃盗を犯し、三十九年六月に、名古屋家裁で特別少年院送致ときまり、愛知少年院へ入院、四十年九月退院。

その後も転々として職をかえ、トラック助手、コンクリート型抜きとして働くうち、駅裏の香具師方〇〇の世話になっていた。その頃知り合ったキャバレーのホステスとの仲が急に冷たくなったのに憤慨し、同女とその情夫を山中に誘い出し殺そうとした事件をおこし、四十二年一月に甲府地方裁判所で、殺人予備罪で徴役一年二ヶ月、三年間の刑執行猶予となる。

四月はじめに名駅構内で、共犯者〇〇君と知り合い、同人の紹介で〇〇飯場で働くうち、四十二年四月十日夜、普通トラックを〇〇君が運転し、E君は助手席に同乗して、市内の某所にさしかかった際、銘酩して歩いていたら二十五才の某君が進行の邪魔をしたので大喧嘩となり、顔面等を丸太棒で殴り、腹部を蹴るなどして約十五日を要する傷害をあたえた。

二人は四十二年四月十三日に飯場を逃げ出し、母の働いていた先で待ち、十六日に共謀者とそこで落合い、E君の知人の居る長野県松本へ行こうと相談し、その旅費ほしき

死刑確定 昭和四十三年五月十九日

犯罪 強盗殺人、死体遺棄、強盗、窃盗、傷害、強盗致死、強姦致傷

住所 不定

職業 無し

昭和十九年七月二十五日生る

共犯者 〇〇君

〇〇サーカスの団長〇〇〇と、母〇〇〇との間に生れ、生後五ヶ月父が殺害されたため東京都の祖父母に養育される。

その後、母の知人、横浜市〇〇方で風間は漁業の見習をしながら、浦島中学の夜間部へ通学、三十五年三月卒業

八王寺市の〇〇建材店でしばらく働き、神奈川県下の砂利取屋に移る。その間、窃盗して三十六年十二月、東京家裁で、中等少年院送致の判決。千葉中等少年院へ入り、三十八年一月退院。

から、赤電話から金を盗みとったり、アベックを恐喝して金をゆするなどして駅の周辺をうろずいているうち、午前一時半、力の弱そうな運転手のタクシイに目星をつけ、しかも金を沢山持っていることをたしかめて乗車し、市内を乗り廻して、三時頃停車させ、運転手を二人で窒息死せしめ、〇万〇千円と時計を奪い、死体を山林にすてて、十七日に松本に行った。

その金も使い果して東京行きの列車内で背広の上着から〇万かを窃盗し東京に到着してのちも三件ほどの犯罪を重ねていたが、遂に逮捕された。

E君の母は最底生活者の落入り易い〇〇宗教に深入りしE君も七年間、その信仰を続けていた。

昭和四十三年五月十九日、死刑言渡さる。

同月二十日に、私の宗教教諭を聴講に出席した。その時看守が「先生、今日は〇〇会の信者のE君が出ましたから注意して下さい」と告げてくれた。

私はあまり心にとめず、「宗教とは真実に生かされることとて、人間の単なる幸福を願うものではない」と話した。

一応話がすむとE君が「先生もうすこし詳しく話して下さい」とたのんだ。

そこで二時間にわたって次のように話した。

宗教とは、真実を求め、真実に生かされる教で、人間の持つ欲望満足による幸福、利益を願うことではない。

全体、幸福とは何でしょうか。財産の出来ることか、健康になることか、長命することだろうか。ところが我々は一を得れば二を求め

思うこと一つ叶えばまた二つ、三つ四つ五つ六つかしの世や

あればまたなきをかぞえて世の人の足りると思う時やなからん

足ることを知らざる人は人でなし、馬と同じでいつもひんひん

欲ぶかき人のこころと降る雪は、つもるにつけて道を忘るる

元来、我々凡夫は、無明煩惱のかたまりで、真実の智慧がなく、ただ煩惱にこきつかわれて苦を重ねている。今君の拘禁生活の苦のものはと反省して見れば、他人はどうなっても、自分だけよければよいという私利私欲から、自分だけの幸福を求めた結果でないが。たとえば赤ん坊は智慧もなく、ただ食欲だけである、この赤ん坊の本能にまかせて食べさせたら腹をこわして苦しまねばならん。我々の無明煩惱も全くこれと同じで、その煩惱のままでは、我々を苦へ落すのみである。

別の子細なきなり

と仰せられている。お念仏申すところに、我亦在彼撰取中で、われ仏と共なりと味える……」

と。E君は、重罪を犯したとは云え宿善深厚な人で、

「先生、よく分りました、何卒真実の宗教に安心の出来るようお教下さい、お願いします」

と申し、一路求道にはげみ、私も出来るだけ時間をこしらえて教誨を重ね、又初歩の宗教書を差入れてやりました。ところが、やっと夜間の中学を出た程度なので、漢字がほとんど読めず、辞書を引くことさえ知りません。そこでわからぬ字があると紙片に書いておいて聞くという熱心さであり、遂にその甲斐があつて六月十日に、第一信を呉れました。

この四五日は真夏のような暑い日がつづいて居ります。

私は先日以来、佐々木先生にお世話になつて居りながら今日まで一度も御礼のお手紙を差し上げませぬ、まことに申訳ございません。又本日は暑い中を、私のために来所していただき、お蔭様で今まで骨の髄までずさんで居りました心の乱れもいくらか丸味をおびて来る事が出来ました。これもひとえに先生の尊いお導きのお蔭と

釈尊が王位を捨て、妻子と別れ、修行せられたのも、真実を求めるためであり、親鸞聖人の九十年の御生涯も、真実の求道に外ならなかつた。このように宗教は真実にめざめることである。

その真実とは、釈尊も親鸞聖人も弥陀の本願まことと教えて下されている。これが真実の親の願である。子供の願は智慧のない自己破滅におわる。親の願は遣えば立て、立てば歩めの親心で、昔の人が、親の意見とおなじの花は、千に一つも無駄はないとおしえてくれる通りだ。

この親の真実の願いを素直に受けるところに、真人間にかえらされるように、仏の本願、親心のおまことを信じて、ああありがたい南無阿彌陀仏と称えようと思ひ立つ時、仏我を抱き取りたまひ、この日から「我仏とともなり」の真実の生活がはじまる。念仏衆生撰取不捨とはこの生活のことである。

元来仏教とは仏の教、教主釈尊から救主の阿彌陀仏の本願真実を聞信するのである。親鸞聖人は御和讃に

釈迦弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し

われらが無上の信心を發起せしめたまいけり

とたたえられ、歎異抄には

深く感謝しております。

また私達のような残酷非道この上ない量罪を犯したものが、一日一日み仏のお力を拝借して、自分達が犯した罪の大きさを悟り、そうしてその大きな罪悪行為を反省懺悔することが出来ますのも、先生にお会い出来たからこそと思ひ、今の私は自分が死刑囚となつて初めて、人間の幸福とは何処にあつたか、おぼろげながらわかつて来たような心持がいたします。

もしもこれが、大罪を犯す前にわかつて居たら世間的にいう幸福であつたかも知れませぬ、昔の諺にもありますように、ころばぬ先の杖であつたかも知れませぬ。

しかし、それでは今のような心境には生涯なることなしに、醉生夢死、平々凡々とした一生を送ることだつたかも知れませぬ。それを思ひますと、今の境界は肉体的に苦痛がありましても、精神的に自分を救つて下さる御仏の力が私の身辺にありますために、何の心配もなく毎日目を心しずかに送らせていたたい居ります。

本當に今の私は先生に心から厚く感謝いたして居ります。またこれからも先生にはたびたびお世話していただくことと存じますが、何卒宜敷しくお願い申します。これからは暑さに向う折がらですからお体にくれぐれもお気を付けて下さいますように。乱筆乱文で失礼します。

お子

昭和四十三年六月十日、書く。

人間には一つ二つは必ず長所のあるもので、E君は元來絵がすきで、居房で色エンピツを使って浮世絵を書いているのを見て、君その手で仏画を書きなさい、そうすると順理で、君の姿、かたちに現われて、柔和な晴々とした顔貌（かおかたち）になるよ、と勧め、早速仏画の軸物、絵具、筆紙等を差入した。本人もとよりすきな道とて喜んで仏画に心を打込んだ。その喜びを第二信に

拝啓、昨日は暑中を私達のためにわざわざ来所して下さいまして誠に有難うございました。

私は先日來、絵具や仏画の軸等を先生にご心配していただいておりますのに、今まで一度もその御礼も申しませず、誠に申し訳ないことだと深く反省して居ります。

又今日は仏本（宗教書籍）を沢山拝借いたしましたので、その中より「安心清話」という本を読ませていただいておりますが、この書中のどの法話も私の悪心、悪体を仏心、仏体に帰して下さいような尊いものばかり、今の私にはこの著書ほど我身を反省懺悔させて下さる本はほかにないように思います。

また私は先生にお会い出来て、先生の御法話を聞かせていただくようになりましてからは、自分の迷いがすこ

く、広大無限の大慈大悲心を私達凡夫の一人々々にいつくしみあたえて下さるものだと、今この私は自分自身に身をもって実地体験させていただいて居ります。私達のような極悪深重の凡夫がいくら躍起になって自分の犯した罪を消そうと思ってもとうてい出来ることではなく、もし本当に救われたいのなら、ただお念仏を称えること、御開山親鸞聖人の仰言る、唯念仏のみ私達が救われる道であるということをお聞きにわからしていただきまして。

私のために生死を超越した新しい世界をあたえて下さいました。親鸞聖人の末弟の一人として、聖人の御教をかたく信じ、この御恩を終生忘れることなく、お念仏大事の生活を送りたいと思つて居ります。

またこのたび許されまして帰敬式を受けられますれば私の被害者の霊に対して、最大のおおびとなることを信じて疑いません、何卒よろしくお願い申し上げます。

昭和四十三年十月一日。

この願いを聞き、手記を読んだ私は非常にうれしく、早速、指導課長に報告し、高山拘置所長に相談し、十一月中旬頃ならよからうと承諾を得、翌二日名古屋教務所へ届け出た。教務所よりの上申が許可され、十一月十四日、真行院連枝が参向下された。その日保古名古屋管区長、高山拘

しずつ取れていきます。また今の私は、何にもいらぬから、ただ静かに仏のお慈悲にすがって南無阿弥陀仏の御名を素直に称えられるような人間になることが出来れば、それが私が殺した被害者へ最高の供養となり、自分の救われることになるかと信じ居ります。ひたすら南無阿弥陀仏、々々々と御名を称えております、それでは……。

七月二日

このように念仏道にめざめかけたので、私も一段と力を入れて、祖師の精神、無我の念仏に同心してもらいたいと手をとって教誨に努力して居たところ、十月一日個人教誨が終つたら「先生、仏弟子にしてもらえる帰敬式が受けた」と担当の看守立合の場で云い、「今の私の領解を見て下さい」と次の手記を手渡しました。

私は死刑囚となり、絶望、虚脱感の中で、自分の救われる道がただ一つだけあることに気がつきました。

それは真実、まこと、大宇宙の法則にそった、正しい宗教である浄土真宗という、真実、まことの仏教だけが今の私を救って下さる最大の力と知り、朝な夕な、片言まじりにお念仏を称えさせていただいて居ります。

お念仏とは、私の考えて居たような小さいものではない

置所長、同課長等二十余名ご出席下さった。

先ず正信偈和讃を誦したあと、静肅に帰敬式がとり行われ、次に私が、E君が受式の出来る身になったまでの信仰経路を簡単に報告した。続いて真行院殿が

「今日、この式に臨み、驚いたことは、本人の顔が柔和な、晴れ／＼として居ることです。私はもう何も云うことはありません、むしろ世の中で愛憎にあげ暮れしている私達の方が恥しくなります」

とのお言葉に、E君はすすり泣きをし、一同は水を打ったようにならずに終わった。私も真行院殿のお言葉に感激し、自坊へ帰るなり、早速E君の胸中を察し、同君に喜びと御祝の葉書を出した。すると十八日付にE君が書信をくれた。

朝夕めっきり寒さがきびしくなりました。

昨日は先生から先に、真行院様などのことを書かれたお便りをいただきました。誠に申し訳ございません。本当なら私から先に、帰敬式のお世話になったお礼を差し上げねばなりませんのに、受式して自室に帰るなり、急に気がゆるんだためか、今日十七日まで寝込んでしまいました。お礼の手紙がおくれました。深く／＼おおび申し上げます。

帰敬式の日のあの喜びと感激は、私なんどの文章では到底書きあらわすことは出来ませんが、受式前の私と、受式後の私とは、精神的に今までと違った安心感が身体全体にみなぎっております。

今日、この安心感を私に与えて下さったきっかけと、親鸞聖人のお教の正しさを学べるように、お導き下さいました先生には、何と云ってお礼を申し上げてよいかわかりませんが……。

佐々木先生、本当に有難うございました。今日この一日を安心して生きて行けるのも、親鸞聖人のお教のお蔭様と深く、師徳を感謝しております。

先生のいつもの御教と、真行院様のお言葉と、歎異鈔の中の「唯念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと。よき人の仰せをこうむりて信するほか別の子細なきなり……念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず……」の御文を味わいながら、お念仏申しておりますと自分の姿の醜さ、愚さ、無力さなど、数限りなく醜いところばかりが……此身に知らされます。

社会にあった時、あれ程悪逆非道なことを犯して来た私が、自分の悪業の数々をすこしずつでも知らされてきたのも、浄土真宗の御教をこの身に受けたからです。

今の私はいつ御仏のおめしにあずかって、それに安

感じられる今日この頃です。それに朝夕のお念仏一つにも、法悦、法喜といった有難い仏恩が私の身に一つ一つ積み重なって行くのがよくわかるようになりました。でもまだ、私の称えておりますお念仏は本物でないと思っております。それは自然にお念仏することが出来ないからです。

そんな私でも弥陀の大慈大悲心にあずかることが出来るのですから、御恩報謝のお念仏を常に忘れることなく一日一日の行事を大切にまもって暮すことを堅くお誓いしております。

またこの世の中に居りまして、本当の信仰とは南無阿彌陀仏以外の何物でもなく、信仰とは、名譽や、利得や病氣回復など、人間の欲望を満足させてもらうためにするものでは決してありません。

人間一人一人がこの仮りの世で生きて行くうえに、借し与えてもらっている一切のものに感謝、報恩、仏恩などを忘れることがないように教えて下さるのが真実、まことの信仰であり、生死問題から精神的な悩み、善悪の諸問題の一切を適切に、正しく教えて、解決して下さいるのが阿彌陀仏であり、親鸞聖人のみ教でございます。

この正しい浄土真宗の教を知るまでの私は、いろ／＼道草をしてみました、結局最後にはこの正しいみ教を

心して行ける大きな信心と安心感をみ仏からいただいたて居ります。またこの身が浄土には参ることが出来なくとも、それは私自身の業ゆえで、地獄に落ちることは、何の不思議も心配もして居りませぬ。かえって地獄に落ちてこそ仏恩の有難さを知ることが出来るので、今のままでは、余りにもみ仏に対して申訳なさすぎます。

唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩をたたく信じて、念仏申すのみです。合掌 釈証信(法名)

帰敬式を受けた嬉しさのあまり、翌日また左記の手記を送ってきました。

私がかねてから念願して居りました帰敬式を受けさせていただきましてから今日までまだ四日しか日数は過ぎて居りませぬが、この四日間程、人間に生れ、この世に生かされて居るしやわせを嬉しく、また感謝したことは過去に一度もありませんでした。

それはお念仏申すことで、広大無限の弥陀の御誓が、この私のような者の身の上に絶えず降りそそいで、私の一日一日を無事に送るようにと見守っていて下さるからです。その御恩を思えばおもうほど、南無阿彌陀仏の御名お六字が無上のよろこびとなってこの身に痛い程よく

受けなければならなかったのです。社会に居たころ入信しておりました○○○会のことを今思い出して、反省しますと、まことに人間として恥しい限りです。この結果が、今日私の死刑囚としての姿でここにであると云ってもこれは決して過言ではありません。

何故ならば自分自身の幸福や、楽しみをして暮すことばかり考えて、信仰の活動を送っていた私でしたからです。そうしたことが正しい宗教でないという事は、七人間の長い宗教活動を送った私に、自分の心の中に残る人間としての糧が一つも無いことで証明されます。

それにひきかえ、人を殺し、金を奪い、死刑囚にならなくてはならないような、心のすさんだ私が、心から反省し懺悔出来るようになりましたのは、浄土真宗の正しいみ教に接してみ仏のお慈悲をこの身にたえすうけて居るために外なりません。

私が帰敬式を受けて、人間らしい心のなごやかさのなかで、安心してくらせるまでに教導して下さいました佐々木先生の御恩を、生涯忘れぬようお誓いしてお礼の終りにそえさせていただきます

南無阿彌陀仏

釈証信

合掌

聖人の正像末和讃に

智慧の念仏することは、法蔵願力のなせるなり

信心の智慧に依りてこそ、仏恩報ずる身とはなれ

と仰せられたが、E君は夜間中学卒業だけで、教誨のはじめごろは、差入れた本の漢字がほとんど読めず、その読み方から手を引いたE君が、このように理路整然と、しかも仏恩師恩を報じたいと念願する身になったのは、全く信心の智慧の賜と敬服せずには居られない。

なお十一月二十一日、拘置所で報恩講勤修のあと、仏恩師恩の話をしたところ、E君が

「先生、念仏申す身になりましたら、日々が御恩の外にありません。私、仏画を書きましても、帰敬式を受ける前は、上手に書こう、ここをこう書いてはめてもらおうと苦労しましたが、受式後は、一筆々々、仏様が手をとって書かして下さる、仏が指示して下さるので、昔の仏像彫刻師が一刀三揮の礼をされたとのことですが、今私も念仏しながら書かせていただき、すべてが仏力のお蔭と喜んでおります。」と感慨ふかく語りました。

私という奴

三瓶徳英

八百年昔、親鸞聖人様が……自分は非僧非俗の愚者であると仰せられた事は、只今の私、徳英に、汝は非僧非俗の愚悪な奴だよとお叱りを蒙って居る気がするのであります。

私は仏縁深く真宗の寺院に生れ、育てられ、学校へも出していただいたことは、みな仏様のおかげであります。その仏様の御恩も、親の恩も忘れて、青年期には坊主になるのはいやだ、米国へ行つて金持になりたいと思ひ、友と二人で、キリストの教会へ会話のけいこを目的に八ヶ月ばかり日曜毎に通ひ、説教も聞かされ、バイブルなど貰ひ、英語で祈りを書いてもらつて、祈りもしました。

米国生れのグレーグ嬢と、英国生れのサンダー老婦人が何時も親切にして下さった。或時、われわれは米国へ行き金もうけがしたいと云うと、グレーグさんが、それもよろうが、米国の神学校へはいりませんか、学資は教会から出してあげようからと、強く勧められたが遂に渡米の縁はありませんでした。

我儘勝手な青年時代の親不孝から発足して、九十年の人

生行路、願れば長かった様でもあり、又短かった様でもあります。

壮年期にいたり、人に生れてよかった、親鸞様に会えてよかったという満足感と感謝のころと、報恩の思いが時々湧き出る様になったのであります。

親の恩 親の御恩が一入られし、念仏する身をおそだての

師の恩 教えられねばなんにもしらで、畜生と同じく死んで行く

国の恩 えらい祖先の血すじをうけた、国に生れてありがたい

仏の恩 何がどうでもどこどこまでも、親が仏だ見すちやせぬ

という出鱈目を書いて見ました。恩師近角常観先生に値遇させていただき、親鸞様の他力廻向の実験信仰、体験信仰に救われ、私という奴の本姓を見とどけさせていただき失神せんばかりに驚き、次いで他力の救済、本願成就の念仏は、極悪の汝をすくわずんばおかじとの大慈悲、真実と聞き、第二の驚ろきにふるえ、少時の後、他力自然の念仏が限りなく湧き出て、坦々とした無碍の大道を闊歩する安

心と、満悦の数十日を経ましたが、段々もとの黙阿弥にかえて、只今では本来の素質を慚愧しながら心中に念仏して日夜をすごさせていただいて居ります

近角先生の愛唱の歌

あともどり、あともどりしてたとるらん

甲斐なきことにころまよいて

池山栄吉先生作

たのまるる ただ念仏のわれにあり

さるべき業はさもあらばあれ

福島政雄先生作

おなじ世に、おなじほとけのむねに生くる

久遠の友を恋いてさすろう

愚人徳英作

今日もまた弘誓の船のなかなれや

苦海の波はよしあらくとも

あとがき

たむきかける私を呼びさましてくるよき言葉である。

近角先生の「人生の信仰」から、先月に続いて「悲観思想と信仰」の前半をいただきます。

一道会の記は御忙しい中を榊原さんから頂き恐縮しております。本年十月の第四日曜の一道会が待たれますこととあります。

杉藤さんの「歎異抄愚考」は、原稿を沢山いただいたておりますので、漸次お読みいただけることと存じます。何かおたずねのことがありましたら、東大阪市新喜多一〇番地が御住居です。

一宮市の佐々木師は「死刑囚の教誨」に専念して下されそこに信心の華のひらけて行く記録を頂きました。こうした方々の救われまことは、そのまま私共のよき知識と仰いでおります。

祖師のお年をむかえられた三瓶翁の法信は、老人ホームがそのまま「お浄土の次の間」と知らされ、枯木に花のホホエマシサをおぼえます。

おわび

五月三日の日講は休ませて頂きます。

「心はいつでも あたらしく
毎日何かしらを 発見する」
の一句をのこした。ともすれば老懶にか

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半

一道会例会

南区駈上町二ノ八八。市電、

新郊通一丁目下車

○毎月二十四日。午前午後。教西寺

法話会

昭和小桜町。市電、御器所通り下車

市バス、北山町下車

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号 四五七